

うのを年に数回程度に抑え、普段の実験の度には、心の中で「シャイセ」を連発するようにしていました。

さて、こう振り返ると、分子研での研究は「シャイセ」の連続で、実験の失敗ばかりしていました。特に、狙って行った（野心的な？）実験は、ことごとく、

失敗しています。幸いにも、たまたま見つけた現象で、いくつかの論文を書くことができたため、今、こうして他大学に転出することができましたが、その偶然の発見が無かったらと考えると恐ろしくなります。実力を伴って研究成果を残した分子研を転出していく方々も多くいるの

を十分認識していますが、私のように運で転出できちゃう人も居るのではないかと思います。若手の登竜門的位置づけの分子研には、助教・ポスドク等の若い研究者の成長を長い目で応援して頂きたいと願望しつつ、私の「シャイセ」の話を締めたいと思います。



## 外国人研究職員の紹介

**Dr. Narahari G. Sastry**

from India



Sastry 博士は、平成 23 年 12 月より 4 ヶ月間、分子スケールナノサイエンスセンターに招へい外国人研究職員として滞在される予定です。Sastry 博士は 1995 年にハイデラバード大学で学位を取得後、ヘブライ大学、フライブルグ大学での博士研究員を経て、1997 年に帰国、ポンディチェリー大学でポジションを得た後、2002 年に現在所属の IICT (Indian Institute of Chemical Technology) に移り、現在は Molecular Modeling Group の主席研

究員を務めておられます。

Sastry 博士の研究は計算科学、量子化学の広範囲をカバーしており、特に実験科学者との共同研究を非常に重視しておられます。特に近年では非共有結合性相互作用に関連する研究に力を入れており、タンパクをはじめとする生体分子の高次構造やドラッグデザイン、超分子化学における分子間相互作用などの分野で、方法論の開発を含め精力的に研究を行ってきています。分子研には当該研究を進めておられる先生も多いことから、コラボレーションを楽しみにしているご様子です。まだ若手といえる世代ながら、既に 170 報あまりの論文を報告し、国内外の主要な賞を数多く受賞されており、今後のインドの計算科学を牽引するリーダーの一人です。

Sastry 博士はインドの有機化学のリーダーである G. Mehta 教授の薫陶を受けていたこともあり、大学院学生時代よりバッキーボウルの理論研究の論文を数多く報告しており、その縁で小生とも数年来バッキーボウルに関する共同研究を実施してきました。平成

20-21 年には INSA-JSPS 二国間共同研究に採択され、その時を含め既に数度分子研を訪問しています。また、今年度の客員教授である九州大学の吉澤一成教授や広島大学の安倍学教授など、日本人の友人も多く、今回の滞在を機に、更に多くの方と議論をする時間を持っていただければと思います。

Sastry 博士は肉食主義者（スラングでいうと Eggitalian）で残念ながら日本の魚や肉、日本酒等を召し上がることはできませんが、それ以外での好き嫌いなどはほとんどなく、どんな料理でも楽しめます。例えばこれまでの岡崎訪問では、伊ト、キャナリーロウ、ひな野などにもよく足を運ばれましたし、一昨年日本化学会大阪年会においては、事前をお願いしておいた肉食主義者仕様の懐石料理を堪能しておられました。残念ながら小生は岡崎在住ではないので、あまり近辺のレストランに詳しくありません。もし肉食主義者用にアレンジできるレストランをご存知の方がおられましたら、是非ご紹介ください。

(櫻井 英博 記)